

源流と鶴蔭の地理と歴史

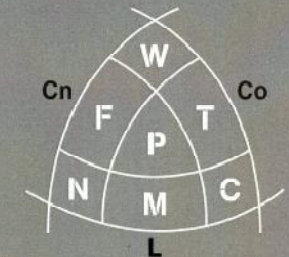
■ 活動プログラム地域 (L)

多摩川の源流の保全 (Cn) のために、協働 (Co) して活動する場について学ぶ。鶴蔭とは山梨県北都留郡の呼称で、鶴峠に至る鶴川流域を意味する。

木俣美樹男 (植物と人々の博物館プロジェクト)

黒澤友彦 (自然文化誌研究会)

西村俊 (北陸先端科学大学)



index

1. はじめに
2. 多摩川源流の地理と歴史
3. 環境学習活動
4. 山村の暮らし〜その課題と協働〜

1. はじめに

初めて訪れた地域を理解するためには、まず小高い所に登って家並み、畑、背後の山、前に広がる海を見ることです。日本全国をくまなく歩き回って、各地の民俗をこと細かく聞き取り調査した宮本 (1984) の父は若い頃の彼にこのようなことを教えたそうです。地域理解は、現地で現物を見る、住民を訪ねて話を聞く、文献や資料を読む、総合して考える、さらに同じルーティンを繰り返して確認するという作業を必要とします。何年も、何度も、何人も訪ねて、不思議に思うことを解き明かしていきます。フィールド調査にはいろいろな手法があります。自動車を用いて短期間に広域を巡る手法から、住み込んでじっくりと参与観察するまで、目的によって選ぶことになります。ここでは関東山地南東部の山村に環境学習活動の拠点を置いて、30年以上にわたって定点観測する手法の一端を紹介します。地域の地理と歴史を学ぶ手法の習得が目的ですので、ここには概要のみを記述します。

2. 多摩川源流の地理と歴史

東京湾に流れ込む多摩川の最上流の地域を多摩川源流と呼称しています。多摩川の厳密な源流は笠取山 (1953m) の水干に発します。源流という表現は物事の大本の起源のことですので、私たちはこの言葉にとっても魅力を感じます。ミズヒ沢、本谷、一ノ瀬川、丹

※引用文献

- 降矢静夫 1998 雪虫 降矢さんを囲む会
小菅村誌編集委員会 1983 小菅村郷土小誌
宮本常一 1984 忘れられた日本人 岩波書店
村松明 2008 日本の川たまたまがわ 徳成社

波川、そして多摩川と名前を変えていきます。小菅川、秋川、浅川、野川は数々の沢や支流の水を集めた多摩川は最終的に東京湾に流れ込んでいます（村松 2008）。

この一帯の広い範囲が秩父多摩甲斐国立公園内にあります。日本の国立公園は、できる限り人間の活動を少なくしたアメリカ合衆国の国立公園と異なって、野生の地のみではなく、多様な人間の生業や産業活動を行っている集落がある地域も含んでいます。秩父多摩甲斐国立公園は4都県にまたがり、その自然は場所ごとに多様な姿をもっています。首都東京に最も近い国立公園として、自然と文化を学ぶためにとても重要な位置にあります。広い範囲が東京都の水源地にもなっています。

(1) 丹波山村

地質は、一部を秩父古生層が占めていますが、大方は中成層になります。武田の隠し金山があったとされる場所もあり、五日市―川上構造線や鶴川断層もあり、第三紀層まで複雑に入り組んでいます（丹波山村誌編集委員会 1981）。集落はおおよそ 640m のところに分布しています。丹波山村は最高峰の飛竜山（2069m）のほかに 2000m 級の大菩薩嶺、雲取山、竜喚山の4座に囲まれています。

この地域では縄文時代の遺跡も見つかっています。歴史書に現れるのは中世末の武田氏が黒川金山を開発した頃からです。15C には小菅氏が小菅と丹波山を支配していました。江戸時代に丹波山はおおよそ天領とされており、塩山から大菩薩峠を越えて青梅に至る甲州裏街道の宿場になっていました。明治期には柳澤峠を越えるようにルートが変更されて、青梅街道と称されるようになり、丹波山村は明治 22 年に発足しました。

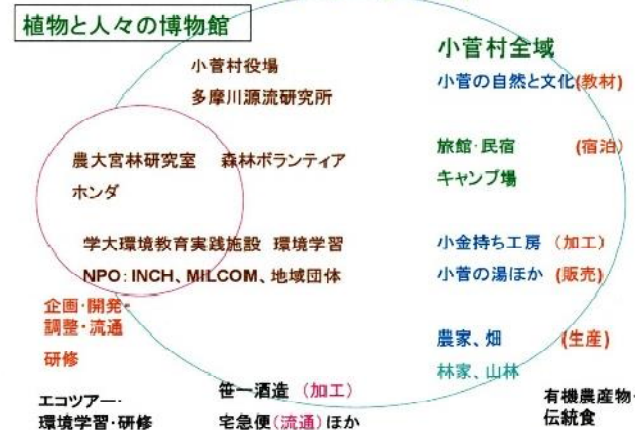


(2) 小菅村

小菅村にはいくつもの峠があります。中里介山の小説で名をはせた大菩薩峠（1897m）のほか、丹波山村につながる大丹波峠（1060m）、大月市につながる松姫峠（1250m）、長作集落を経て上野原市につながる鶴峠（850m）です。多摩川を下る交流よりも山梨県内での交流が多かったように見受けられます。詳細は次の4項で学びますので（小菅村誌編集委員会 1983）、ここでは瓜生（1981）の各文を引用しておきます。「小菅には奥多摩の荒々しさはない。人も山も川も媚々としている。しっとりと落ちついている。小菅は美しい村である。日本一ともいいたいほどに美しい。人々の心根も濃やかである。」

30 年ほど前に書かれた何冊かの本には、小菅村や丹波山村が観光や精密工業などの新しい産業をはじめて希望を見出したと述べられています。山村が過疎・高齢化を押しとどめ、持続可能な地域社会に向かうように希望が述べられてきましたが、残念ながら成就してはいない現実が続いています。下記の図は私たちが小菅村に向けて考えた提案の最初のものです。この案が数年間の間にどのように展開してきたかを学習素材にすることにしたいと思います。現在の図、さらに将来への図を比較して現実を良い方向に変える議論を進めてみましょう。

奥多摩農山村の豊かな暮らしへの生業・産業振興ネットワークづくり



(3) 鶴川流域（相模川の支流）の上野原市西原

山梨県北東部に位置する上野原市西原は、権現山（1312m）と三頭山（1528m）に挟まれた鶴川の河谷の上流、標高450～600mに多くの集落を点在させています。このため、この地は「鶴蔭」とも呼ばれます（降矢 1998）。鶴蔭という呼称は山梨県の北東部、北都留郡の鶴峠の下に位置することを表していると思います。鶴峠を経て小菅村に、西原峠を経て奥多摩町と松原村に通じています。古くはこれらの峠を人と牛・馬で越えて炭などを運ぶ交易が盛んでした。鶴川は小菅村長作に発し、三頭山を分水嶺として、この流れは桂川を経て相模川になり、神奈川県丹沢山塊の水も集めて相模湾に注ぎます。上野原駅とバス道路がつながったのは1955年のことでした。月平均気温は1月で約0度C、8月で25度C比較的清涼です。年間降水量は約1700mmです。植生は照葉樹林帯から落葉広葉樹林帯へと移行する地域です。

西原の中群遺跡からは先土器時代と推定される石器が出土、縄文時代の遺跡は田和など各所で確認されています。弥生時代の遺跡は上野原には見られるが、西原には及んでいないようです。中世には古郡氏の支配下にありましたが、続いて加藤氏に支配が変わり、武田氏が滅びた後、小競り合いがたびたび繰り返され、江戸時代に至って天領になりました。上野原は甲州街道の宿場町として栄えたが、助郷や飢饉に疲弊することが多かったようです。明治34年に中央線上野原駅が開業しました（上野原町誌編集委員会 1975）。

この3巻に及ぶ大部の町誌を見ても、丹波山、小菅および西原はほとんど記述がありません。無土器時代から縄文時代は豊かな山林が人々の暮らしを支えたので、人跡があったのですが、弥生時代以降、水田でできない雑穀畑作の村は人忘れ去られて、比較的のどかな暮らしを過ごしていたのかもしれませんが、焼き畑のローテーションは栽培植物ばかりでなく、人間が利用できる多くの野生植物を与え、また、これらを求めて野生動物も訪れました。時代に忘れ去られたので、今と変わらず穏やかに豊かな暮らしがひっそりと営まれていたように思われます。何が豊かかの考え方を問い、考えてみましょう。



▲縄文式土器の作り方の展示

3. 環境学習活動

(1) 景観を観察する

家並み、家の建て方、位置、道路のつけ方、
学校、役場、公民館、消防署、駐在所など公共施設の位置
歴史的建造物、社寺、城址、遺跡の縁起と現在の様子
田畑、栽培植物、家畜の種類、生育の様子
山野、河川、全体の景観

(2) 歴史を探る

①過去から現代へ：歴史学、考古学、
古生物学などの視点
文献資料を読み解く
遺跡を見る、民間信仰を探る
②現代から過去へ：
民俗学、文化人類学、民族学、
民族植物学などの視点

(3) 野生生物を観察する

森林の樹種、河川の生物
植物相、動物相、キノコ

(4) 生業・産業の成り立ち

①伝統的生業および産業
林業
山村農業、オオムギ、雑穀、コンニャク、ワサビ
養蚕
養魚、ヤマメ、ニジマス、イワナ
狩猟
②観光業など
店舗、自動車移動店舗
旅館・民宿
キャンプ場、釣り場
物産館、温泉
③工業、鉱業
精密工業
④その他

(5) 新しい地場産業の可能性を探る

①エコ・スタディ・ツーリズム、
②生業の継承
③農林業の継承
④地場産業の可能性



▲雑穀栽培の後を整理するために焼いている



▲小菅村水の館の渓流釣りの展示

4. 山村の暮らし～その課題と協働～

人間が生きていく中では様々な生命や動植物と出会います。特に山村は自然と人間の距離が近い地域です。小菅村の地域・文化を知り、小菅村の現状と課題、協働について考えてみましょう。

また、近代の地域社会（都市部）では、地域社会が希薄になり、地域の交流がなくても生活が成り立つ時代となりました。そのような中での新しい課題と協働についても考えてみましょう。

●山村地域：山梨県北都留郡小菅村

＜地理＞ 北緯 45 度、東経 139 度、標高 600 m・・・行政のページなどから分かる。

周囲を 1500 ～ 2000m の山に囲まれており、隣接する甲州市、大月市、上野原市に出るには、どこも峠を越えて車で約一時間かかります。

＜人口＞ 920 人（360 世帯） ※ 2007 年 10 月現在
小学生 42 人、中学生 38 人。

5%近くが1ターン（子どもも含め 50 人ぐらいいはいるでしょう）

『少子高齢化』

※高校進学の際、小菅村から通える高校は県立上野原高校と私立校のみ。スクールバスの往復もありますが、中学校卒業時に小菅村を出てしまう若者が多いのです（下宿）。高校卒業後に進学する者が増えるにつれ、そのまま上京先での就職する人も多くなりました。現在では、小菅村役場をはじめとする第3次産業での就職がほぼないので、土木・林業などの就業で帰ってくるしかないのが、なかなか帰れなくなってしまうことが要因の一つでしょう。

対策1：定住促進「村営住宅@中継地区（井刈）・田元地区（淀）・川池地区（宮川）」

小菅村は確実に過疎で、平成元年頃より村営住宅による、移住者を募ってきました。

①中学校の複式学級対策のため。

②移住者による過疎化の防止（＝税金収入含む）のため。

対策2：少子化対策プロジェクト

「小菅で子育てしませんか」

「お嫁にいらっしゃいませんか」

（1）「交流人口」拡大への動き ～行政の目標 H18 2,500 人→ H23 5,000 人

村だけでは山と畑を守れない。源流ファンを増やし、村の小さな企業をどう支援するか。そこにしかない人と観光、そして森を観光資源にと考えました。

多摩川源流祭り；昭和 62 年以来、これまでに 20 回。村おこし・観光的な要素が強い。

多摩川源流研究所：本来は山村振興のためのシンクタンクだが、「源流体験教室」などの案内業務が多い現況にあります。

多摩川源流大学：東京農業大学を中心に村の生活自体が実習内容のカリキュラムとなっています。

観光協会：干し柿作り体験など文化的な体験講座を企画しています。

観光ネット・ワーク：地元の技を体験できるプログラムをコーディネートしています。

植物と人々の博物館：東京学芸大学を中心にエコミュージアム日本村づくり活動の「コア博物館」として中央公民館で活動中です。

エコセラピー研究会：森林での癒しを中心に、森林公園キャンプ場も運営している。

村民の癒しも目的としています。

全国源流の郷協議会：全国と同じ境遇にある自治体がスクラムを組む場。小菅村が発起人です。

○プログラム例；シンポジウム「We love TAMAGAWA
☆ いのちをつなぐ 138」

（2）「伝承・継承」の動き

少子高齢化、地場産業の低迷に伴い、伝統の伝承・継承が難しくなっています。

100%自然塾：川、キノコ・山菜採りなど昔からの遊びを伝えることが指導者養成になっています。

小菅人を育む会：小菅の子どもたちの活動を指導しています。

ゆうゆうクラブ：高齢者を中心に、竹細工や木工細工などを行っています。

小金持ち工房：味噌や漬物、ソバなどを作っています。

企業：ホンダ、東京電力、JT、東京都水道局（多摩川水源林隊）など。

多摩川流域大学：東京学芸大学、東京農業大学、法政大学、早稲田大学など多数、村で活動しています。

源流きらり：微生物を使用した環境浄化微生物を販売し、「清流」を守る意識を発信しています。

○プログラム例；干し柿・味噌・こんにゃく作り体験、キノコ・山菜・わさび採集

＜気候＞ 年平均気温 12℃前後、低温多湿、日照時間が少ない



▲雄雞畑の説明を聞いている

夏場は大変涼しいため熱帯夜はなく、クーラーを必要としません。冬は当然寒いのですが、積雪量は少ないです。しかし、日陰の雪は春まで溶けることがありません。雪が降っても除雪作業が早いので、交通に關して心配なことは「凍結」です。村内の車は、「4WD＋スタッドレスタイヤ」が冬の標準装備です。

以前は、「寝ていて掛け布団の息がかかる部分が凍ったよ〜」という話を聞いたことがある（実際に、30〜40年前は村内にスケート場があった）。「温暖化」のおかげで以前よりも暮らしやすいらしいという面白い感想もあります。

○プログラム例：体感・耐寒キャンプ、まふゆのキャンプ

＜地形＞ 谷の川沿いに民家があります（典型的な山村の地形）。

村の94%が山林（多くが水源林）。多摩川の流水の2割は小菅からきているらしい。小菅川の流域は山の傾斜が穏やかであり、隣の丹波山村に比べてかなり穏やかですから、峡谷、渓谷という言葉は当てはまりません。地形についての詳細は地質学で学びましょう。

○プログラム例：「源流体験」講座＊。小菅では難しいが→「化石さがし」や「洞くつ探検」。

＊子どもたちが水にぬれ、遊び、泳ぎながら源流の澄んだ水を体験する事業。小菅川の穏やかな地形を利用した取り組みです。

＜土地＞

陽当たりの良い土地は極限にまで畑に利用しています（急耕地）。そのため、「庭が広い家はほとんどない」のです。

※冬は日当たりが悪く、作物が夏しか作れない土地を「ナッチ（夏地）」、冬も日当たりが良く、麦類が栽培できる土地を「ムギチ（麦地）」と表現します。

農産物は、30年ほど前は「コンニャク御殿」と言われるぐらいに、コンニャクの値がつき（高く）、小菅村は一大産地としても有名でした。沢の清流を生かしたワサビの生産量は山梨県1位です。10年ほど前には小菅川本流沿いでは稲作も行われていました。石積みで囲ってあるところはほとんどが水田であったようです。

○プログラム例：わさび田を作って自分で育てる、休

耕地の貸出、稲作分布を調べ生活を知る、急耕地の作物を調べる

＜一年の生活＞

春：種まきの季節

4月。ジャガイモ（せいで）、蕎麦、夏ソバをはじめ多くの種が播かれる。新緑の季節は、村人にとっては山菜・野草の季節である。ウド・タラ・ワラビなども畑で栽培している。5/4には「多摩川源流祭り」が開催され、村民総出のお祭りで、手づくりの地元の食材などが提供される。

夏：観光

小菅村は涼しく、グラウンドをはじめとするスポーツ施設が充実しているため、青少年のスポーツ合宿が多い。旅館は忙しい。下流域との交流も多く、物産展などの出張も多い。また、各地区ごとのお祭りが集中するのもこの頃。稲刈り時。

秋：収穫の季節、紅葉は観光の種

紅葉の季節は繁忙期である。交流ある中下流域も最もお祭りが多い時期。しかし、紅葉の終わりごろはもう冬を迎えているのです。干し柿はこの季節の風物詩。キノコ採りは9〜10月がメインになります。3時ぐらいいから日陰になり、もう寒いです。

冬：狩猟

11/15日から狩猟解禁。以前は待ち遠しくて、前日の晩は銃を磨きながら楽しみで眠れなかったようですが、現在は、年中、「有害鳥獣駆除」に出動しているので、解禁の喜びは少ないようです。紅葉シーズンが終わるともう冬です。お客さんも減り、渓流魚の出荷も減ります。畑もできないので、この時期は「冬眠する」というそうです。「冬眠」して、現金を使わない（現金収入がなくなるので）という意味のようです。

山道では排水溝に溜まった落ち葉を皆さん取りに行きます。だいたい、誰の場所が決まっているようです。寒いので、1人暮らしの高齢者は、都会の息子たちの家に冬の間だけ養生しに行ったりもします。

＜村の仕事＞

第1次産業：水産業（渓流魚の養殖）は3社が専業。農業は専業はいない。

第2次産業：土木建築業が一番多いと思われる。公共事業の減少と東京都の水源林を多く持っている（村内

の森林の50%強)こともあり、山仕事(林業)への転化も多い。

第3次産業:合併が迫られている状況でもあり、小菅村役場、小菅の湯ともにこの数年職員の採用をしていない。観光業(旅館・民宿・キャンプ場)はシーズンの集客は固定客がいるので、ウィークディやオフシーズンにどれだけのお客を増やせるかが課題。

※青梅市が自動車で1時間のため通勤圏。そのため、青梅市方面に就業している人も多い

<集落制度>

小菅村は8つの地区に分かれる(小永田、長作、橋立、中組、田元、余沢、白沢、川池)。お祭りは各地区ごとに行っている。

橋立地区・小永田地区は神代神楽で、継承されている。中組地区は「太鼓」があるのだが、夏にバーベキューを行うにとどまっている。

橋立地区・余沢地区は1月1日に寄り合いがあつて男たちは飲む。

川池・田元地区は合同で8月に獅子舞を行っている。

<隣保組(りんぽぐみ)>

地区ごとに更に分割されるのが「隣保組」である。一番分かりやすくいうと、「回覧板が回る組」である。また、隣保組ではお葬式を協力して助け合うというのが一番の大きな仕事かもしれない。以前は、土葬であったため、穴掘りから葬儀の全てを隣保組で助け合って行った。葬儀に関しては、この1~2年で青梅市や上野原市の斎場で行う例が一気に増えた。通常時は隣保組による集まりなどはほとんどなく、寄り合いに関しては「常会」という地区の集まりが基本になっている。

小菅の湯周辺の中組地区を例に取ろう。中組地区は山沢・大久保・井刈の3隣保に分かれる。そして、村営住宅はほぼ別隣保になっているといえる(村営住宅には高齢者がいないので、お葬式などがないので)。隣保でお葬式を行う際、大久保地区はまだ若い衆が多いので大丈夫だが、山沢・井刈は若者が少ないので、お互いに協力し合うということになっているらしい。山沢は「限界集落」と言えるのかもしれない。

●都市の「協働」の動き

・新しいコミュニティづくり(キーワード)

居場所⇒「コミュニティカフェ」、「たまり場」、「フリースペース」、

「地域子ども教室」⇒「放課後子どもの時間」

・エネルギーの枯渇⇒新国家エネルギー政策

・自殺者の増加⇒自殺遺児のネットワークづくり

(実習)「地域」聞き取り調査にむけて

その地域を知るために。

・昔からの暮らしぶり

・昔の山と人の関わり(利用法)

・昔と今の違い などなど

(黒澤友彦・西村俊)